

平成29年4月25日（火曜日）

生涯教育の先駆者 廣池千九郎 ゆかりの人

①小川含章



中津市出身の教育者・廣池千九郎（1866～1938）は、道徳科学（モラロジー）の提唱者として知られ、「道徳こそが人類の安心・平和・幸福の基礎である」の信念のもと、学校教育と社会教育に取り組みました。その歩みは多くの人に支えられてのものでした。今回より「廣池千九郎ゆかりの人」をテーマに、廣池に影響を与えた人物について紹介していきます。

「麗澤館」を主宰

小川含章は文化9年



小川含章

（1812）に、日出藩の町医者小川玄龜の長男として生まれました。名は弘蔵または式、字は民徳、号を含章と称しました。同藩の藩儒帆足万里に学び、35歳で但馬国生野（現在の兵庫県生野）にある学問所に司鐸（校長）として赴任します。小川は麗澤館と称するこの学問所で代官らの子弟を教えるかたわら、地元浄願寺で町の人たちに儒学や実学を講じました。ちなみにこの麗澤という語は『易経』の言葉で、「麗ける澤は兌び習す」を出典とします。「並んでいる沢が互いに潤し合う姿は喜ばしい。立派な人間になろうとする者は、志を同じくする友と切磋琢磨する」というような意味です。

当時、生野は銀山を擁する天領でしたが、抗夫の風紀が乱れていました。時の代官から風紀の改善を頼まれた小川は、『生野銀山孝義伝』を著します。これは生野地域の親孝行者を調査し、そのエピソードをまとめたもので、人々の教訓書としたので、廣池の基盤となる教え



小川含章が主宰する麗澤館のあった来迎寺（大分県大分市錦町）

明治維新後、小川は大分で漢学塾を開き、名称を生野の学問所と同じ麗澤館としました。そして師範学校の試験に失敗した17歳の廣池千九郎が入塾したのが、この麗澤館でした。廣池は小川に多大な影響を受けます。とくに尊皇の精神や実学の重視、学問に対する姿勢は廣池のその後、の学者・教育者としての基盤となるものでした。また、三浦梅園、帆足万里、小川含章と受け継がれた科学的思考を重んじる大分儒学の系譜は、後に廣池が道徳を科学的に研究しようとする素地となります。廣池は明治25年（26歳）、「小川先生の遺志を嗣ぎたい」「正しい学問を致し、而して皇室に貢獻し奉りたい」という志を立て、郷里の中津を離れ京都へと立ち立ちます。波乱万丈の人生の幕開けでした。晩年、現在の千葉県柏市に道徳科学専攻塾を開設した際、廣池は塾内に建てた私邸を麗澤館と名付けました。これは青年期に受けた小川の学恩に感謝し、その遺志を継ごうという廣池の思いの表れです。戦後、同塾は大学へと発展し、名称を麗澤大学として現在に至っています。

（公益財団法人モラロジー研究所廣池千九郎記念館学芸員・矢野篤）